

せっしゃう はる なつ あき ふゆ まい え えが
雪舟さんが、春夏秋冬を4枚の絵で描いています

<4F 日本・東洋美術室>

ARTIZON MUSEUM



せっしゃう しきさんすいず
雪舟《四季山水図》
むらまちだい せいぎ
室町時代 15世紀

Q1. この4点1組の絵には、全部で8人が描かれている。
この、ロバに乗ってる人を見つけてね。

どの景色のなか？

- 春 夏 秋 冬

どこに何しに行くの？

なぜそう思った？

- 友だちの家におしゃべりしに行く
 お世話になった人へあいさつしに行く
 すてきなどこかへ旅をするところ
 ながめのよいところを探している



Q2. こんどは、この岩に腰かけている人を見つけてね。

どの景色のなか？

- 春 夏 秋 冬

何してるの？

なぜそう思った？

- なんとなくボーッとしている
 散歩の途中でひと休み
 古いむかしのことを思い出している
 遠くに住む友だちのことを考えている
 すてきな詩をつくらうと悩んでいる





せっしゃ

雪舟 1420-1506 ?

ご自宅から大きな画像を見たい方は、

作品検索より「雪舟」で検索！



「ゆきふね」ではなく、「せっしゃ」。

600年ぐらい前、現在の岡山県総社市あたりで生まれたお坊さん。小さい頃、お寺の修行に励まず絵ばかり描いていて叱られ、柱にしぼりつけられたまま、「足を使って涙でネズミの絵を描いた」というのは作り話。でも、そんなデタラメが生まれるくらいに、すごい絵描きだったと尊敬されてきた。

10才過ぎに京都のお寺に移り、本格的な禅宗の修行に打ち込む。文学や絵画も学んだ。それらも大事な修行の一部。20代なかばで、山口に招かれお寺の住職になる。40才前後に、「雪舟」と名乗るようになったらしい。

1467年、47才で初めて中国（その頃は「明」という）に渡った。帰国後、大分に引っ越したり、あちこちに旅行。岐阜や天橋立にも行っている。80代で亡くなるが、いつ、どこで亡くなったか、詳しいことはよく分からない。

画家でもあるお坊さん（僧侶）を「画僧」という。雪舟は、室町時代にたくさん活躍した画僧の代表。残されている絵は、およそ50点ある。

○ 雪舟《四季山水図》室町時代 15世紀、絹本墨画淡彩

右から、春夏秋冬。そう並べるのがお約束。絹の布に、主に墨で描き、ところどころに色を使っている（紅葉や水面など）。描かれているのは想像上の中国の景色、描かれている人物はすべて中国人。この絵は、江戸時代、福岡藩主の黒田家に代々伝えられ、よく知られたものだった。



○ 雪舟と中国

そのころ、中国は日本人が憧れる先進国。なにしろ四千年の歴史をもち、つねに日本をリードする文化大国だった。多くの人たちが行ってみたいと思ったが、飛行機がない時代、海を渡って行くことはけっして簡単ではない。自由に行けるわけでもない。雪舟が幸い中国に行けたのは、大内氏という山口の大名から中国へ派遣する使いの一人に入れてもらえたから。中国に2年いる間、雪舟は優れたお坊さんや有名な画家にあってできる限りたくさんのかを学ぼうとした。また、有名なお寺や湖、山を見ておこうとがんばる。二度と来られないだろうと思えば、古くから詩に書かれ、絵に描かれた景色はおさえておきたかったはず。

でも日本に帰ってきた雪舟は、「期待したほどじゃなかったよ」と弟子に語る。ほんとに「期待したほどじゃなかった」の？雪舟は、中国で何も学ばなかったの？実は、勉強熱心な雪舟は、2年間ですごくたくさんのかを吸収したと考えられている。でも何をどういうふうにするの？そのところが、ほんとうに難しい。この絵は中国に行く前に描いたのか、帰ってきたあとか、実はよく分からない。研究者の間でも意見が分かれている。雪舟は中国に行く前にも、中国の歴史や文学、絵画についてたくさん学んでいた。この絵に描かれているものが、実際に訪れてみて感じたことを映しだしているのか、あるいは、すでに知っていた世界なのか、想像してみるのも面白い。